
❖ 基礎研究部門 ❖

大蔵経総合研究班・国際学術交流プロジェクト 研究報告会

天台密教経蔵の世界を探る―青蓮院門跡吉水蔵の
デジタル・アーカイブ創成をめざして―

2025 年 2 月 21 日（金）10:30～12:30

龍谷大学大宮学舎 清和館 3 階ホール



会場の様子



❖ 概 要 ❖

2025 年 2 月 21 日（金）午前、龍谷大学世界仏教文化研究センター 大蔵経総合研究班主催、「天台密教経蔵の世界を探る—青蓮院門跡吉水蔵のデジタル・アーカイブ創成をめざして—」と題する研究報告会が開かれた。

青蓮院門跡「吉水蔵」には、天台宗の基礎を固めたとされる比叡山延暦寺の第 3 代座主・慈覚大師以来の天台密教を中心とした貴重な聖教や記録が相伝されていることから、平成元年（1989）に重要文化財に指定された。近年、龍谷大学と東京大学史料編纂所が連携してその調査とデジタル化に取り込んでいる。その成果として、「青蓮院吉水蔵聖教」から、天台宗の高僧源信や天台座主慈円の著作に関わる、自筆本を含む貴重な文献が再発見され、本報告会を通じてその意義が新たに学界に紹介された。

道元徹心氏（龍谷大学教授）による研究報告「青蓮院吉水蔵『浄土厳飾抄』の再検討」においては、青蓮院吉水蔵に架蔵されている、恵心僧都源信の『往生要集』に関わる論義文献『浄土厳飾抄』が取り上げられた。先行研究によると、この写本は弘安二年（1279）頃の鎌倉末期のものとされていた。しかし、今回の紙背文書調査から、先行研究より 107 年さかのぼる承安二年（1172）頃、平安末期の写本であることが明らかとなった。この年代差は叡山浄土教の展開を研究する上で極めて重要な手がかりとなることが検証された。

菊地大樹氏（東京大学史料編纂所教授）は、「青蓮院吉水蔵の歴史的特徴—三昧流聖教を中心に」と題する報告において、まず寺院史料の特徴を紹介し、紙背文書を含め、悉皆調査の重要性を提示した。次に、現在進められている東京大学史料編纂所による青蓮院吉水蔵所蔵資料のデジタル撮影の意義を説明した。またさらなる調査の展開により、貴重な文化財を史料として活用することから、近年真言密教研究によって牽引されてきた中世密教研究に、台密三昧流の文献学的新知見を加え、さらに新たな段階を生み出す可能性を展望した。

阿部泰郎氏（世界仏教文化研究センター招聘研究員）は、「青蓮院吉水蔵の慈円著作聖教—自筆テキストを中心に—」と題する報告において、慈円による自筆聖教『毗逝別』を取り上げた。本書には、慈円が建仁三年（1203）に見た「建仁三年夢想記」が含まれていた。これまで写本でしか知られていなかった「夢想記」が、奇しくも東京大学史料編纂所に保管される『慈鎮和尚夢想記』と繋がって完全に復元された。この「夢想記」が、後の『愚管抄』著述の原点となったため、その自筆本が再発見されたことの歴史・思想的な意義が大きい。